

アフガンショックで露呈した アメリカ式リーダーシップの 欠陥の波紋

在仏コラムニスト 安部 雅延



米政治家と軍指導者の無能

アメリカのバイデン大統領が、いかにアフガンニスタンからの米駐留軍の撤退を正当化しようと、世界で実際に起っている混乱と悲劇、今後への懸念の言い訳にはなっていない。アメリカが世界に恥をさらした事実は歴史に刻まれるだろう。

中でも最もバイデン氏を追い詰めているのは、今年4月14日に撤退宣言をして以来、「米軍が訓練した」アフガニスタン政府軍は最強だ、「カブールが陥落することはありえない」「現政権がタリバンと平和裏に混乱なく新政権を樹立できるだろう」と公言していたことだ。

その言葉はすべて裏切られ、アフガン軍はタリバンの前にあっけなく敗走し、米軍が残した高価な戦車や大量の武器をタリバンに明け渡し、数日のうちにカブールは陥落した。タリバンによって国は制圧され、報復や処刑、女性への弾圧を恐れる市民が空港に殺到し、大混乱となり死者も出た。

国を脱出できなかったアフガン人や外国人は、タリバンの指導者が「全員に恩赦を与える」とか、「報復はしな

い」「女性の権利はイスラム法の範囲内で守られる」といっても、過去のタリバンの行状からして、まったく信用はできず、市民は恐怖に打ち震えながら死と隣り合わせの生活を強いられている。

日頃、民主党支持のリベラルメディアの米報道専門TV CNNでさえ「バイデン政権最大の失策」と評し、バイデン氏の言い訳にも理解を示していない。そんな中、保守系メディアのフォックスニュースは、イラク戦争やアフガニスタン駐留経験を持つ元米陸軍所属で、現在は上院議員のコットン氏に意見を求めている。

彼によれば、この20年に亘る米軍のアフガニスタン駐留の期間、歴代米国防長官や現地最高司令官らが繰り返し、現実とはかけ離れた報告を続けていたことだ。特に、アメリカが訓練したアフガン国家治安部隊が、いかにタリバンに対して戦闘能力を向上させ、発展させているかという主張は事実誤認も甚だしいものだった。

トランプ前大統領に解任されたジェームズ・マティス元国防長官は、2010年7月に米中央軍司令官に指名される時の公聴会で「アフガニス

タン軍はタリバンに対して、ますます効果的な存在になった」と証言し、アフガニスタン軍は米軍と並び「タリバンにとって最悪の悪夢だ」と付け加えている。

同じ年の12月、当時の国防長官のロバート・ゲーツ氏は記者団に対して、アフガニスタン軍は「カブールの治安に責任があり」「うまく機能しており」「改善が続いている」と語っている。

さらに2012年当時、アフガニスタンでの米最高司令官ジョン・アレン將軍は、下院軍事委員会で「タリバンを恐れることはもうない」「アフガニスタン軍は私たちが思っていた以上に優れている」と述べた。

また、2014年11月、アフガニスタンの当時、最高司令官だったジョン・F・キャンベル將軍は、米軍の支援を受けるアフガニスタン軍はタリバンと互角に戦えるか、との質問に「彼らがタリバンと対峙する時は、いつでもタリバンは彼らの支配地域を失う」と答えた。

同將軍は「私は数年前から今日に至る変化について、見たままの事実を話している。彼らは自分自身を守る能力を持ち、彼らはアフガニスタンで最強

American Leadership



James Mad Dog Mattis

の組織だ」と述べたことも記録されている。

リーダーの無能さ露呈

バイデン大統領は「戦うつもりのないアフガン治安部隊とともに戦う意味はない」と言い訳した。確かに、どんなに資金や武器を投入しても軍兵士の戦闘意欲まで確認することはできない。結果的に、アフガン軍の兵士はリーダー不在の中、米兵ほどの愛国心も、最後まで身を挺して戦う決意もなかったことが明らかになった。

米歴代政権は、特にオバマ政権下でアフガニスタン政府軍と民間組織を増強するために巨額の資金を投じ、タリ

バンとの戦闘を繰り返してきた。だが、歴代政権の戦略は、時の国防長官や現地総司令官の誤った現状認識によって、逆に、反政府勢力への支持が増し、早い時点での交渉の機会も逃してしまっただ。

重要なことは、アフガニスタン国民の間には、常に勢力争いの内戦があり、タリバン＝悪の単純な構図ではない事実を理解できず、タリバンの一掃に集中し続けたことだ。中東で長年犯した過ちである自由と民主主義、法の支配、人権の価値観の押し付けをアメリカは行い、成果は得られなかった。

最終的にたどり着いたタリバンとの昨年の和平合意は、アフガン政府がタ

リバンから譲歩を引き出す余地のないものだった。さらにはロシアや中国がタリバンと接近し、政権を奪還した時に支えとなる外国勢力の足固めも許してしまっただ。

英BBCはバ

イデン氏の失敗は「アフガン政府及びアフガン軍に対する過大評価とタリバンに対する過小評価がもたらしたものだ」と結論付けている。米政府のアフガン戦略立案者は、国防長官や司令官からの事実とかけ離れた報告を鵜呑みにし、現実離れた戦略を展開し続けてきたことが伺える。

そもそも米軍は、2001年9月11日の米同時多発テロの首謀者であるウサマ・ビンラディン容疑者らアルカイダのメンバーをかくまっただ、当時のタリバン政権への報復として軍事介入した。2002年にはタリバンを政権の座から引きずり降ろし、山岳地帯に追いやることに成功した。

米ウォールストリートジャーナルは、タリバン研究の権威、ベッテ・ダム氏の指摘を紹介し、アメリカが敵の戦闘員を捕まえることを最優先する中、地元民がアメリカ軍を利用し、対立する他のアフガン勢力に対する個人的な怒りを解決していることに気づかなかつたことが、そもそもその対アフガン政策の誤りだったと指摘している。これはイラクやシリアで犯したアメリカの誤りでもあり、現地を慎重に調査、分析し、まずは政治的交渉を的確

に行うことなく、ある集団を悪と定め、一方的に叩くやり方を繰り返してきた過ちに酷似している。

同時に世界から高く評価されているアメリカ式リーダーシップにも大きな欠陥があることを世界に見せつけた瞬間でもあった。自分の評価を上げる嘘の報告をする部下に支えられ、正確な現状把握ができないトップリーダーの話は、どこかで聞いた話だ。

アフガン軍幹部の腐敗に目をつぶったことや、結果的に、アフガン軍のリーダーシップ不在の深刻さを見抜けなかつたアメリカのトップリーダーの無能ぶりは、ハーバード大学ビジネススクールに象徴される、アメリカ式リーダーシップやマネジメントに暗い影を落とし、ビジネス界にも波紋が広がらそうだ。

アフガン・ショックで露呈したリーダーの無能さとリーダーシップ不在は、民主主義におけるリスクマネジメントの在り方に大きな問題提起を引き起こした。これはコロナ対策の政府の意思決定にも問題提起している。そんなアメリカの退潮とともにタリバンに後ろで影響力を行使する中国の存在感がますます増すことを憂うばかりだ。